

句集

星月夜

白井菜々

序

大阪府枚方市の白井菜々さんも又句集を纏められることになった。

彼女とのご縁が生まれたのは関西エリアのメンバーたちが自主的に誘い合って吟行句会を初めた頃であったと思う。当時から句仲間の中では頭ひとつ抜けた存在で、格調高いその表現力から既にある程度の実力の持ち主であることはすぐにわかった。

坂がかかる 芦屋の家並風薫る

月の浜松影濃ゆく落しけり

菜々さんの作風を語るにあたってまずこれらの作品を揚げておきたい。いずれも素晴らしい写生句ではあるが、彼女の探求心はこのレベルではまだ満足できなかったのである。

あるとき彼女は私の先輩の作家とともにかつらぎ庵で阿波野青畝師と一緒に写った一枚の写真を差し出した。彼女もまた青畝師とのご縁があったのだ。前出の完成した写生句でもなお足りなさを感じるのは先生の薫陶のことばが彼女の中に生きていたからだと思う。

いぬふぐり休耕田に世界地図

紅葉山夕日を帯びて炎上す

しがらみのあぶくは音符水温む

そしてこれらの作品が彼女の出した答えである。前作と異なる点は作者の心が豊かに遊んでいること、わかりやすく例えれば袴を着て威儀を正して詠んだ作品と改まることなく幼子のような好奇心で素直に心を開いて詠んだそれとの違いというふうに言える。

つばくらめ山紫水明袈裟懸けに

満天の星へ合唱庭の虫

いづれも融通無碍といわれた青畝師の作風を思わせる作品で抜き出せば枚挙にいとまがない。こうした作品を生み出す彼女の作句姿勢にも学ぶべき点があるので触れておきたい。

散る花に沈思黙考一詩人

菜々さんは吟行のとき一人離れて静かに作句されるタイプ、この作品は彼女の自画像である。対象物と心を通わせて彼らのメッセージを聞くためにはしっかりと立ち止まらなければいけない。これはとても大切なことで、私もそのむかし吟行のとき先生がどこで立ち止まり何を見ておられるかを遠く離れて観察したものである。

草矢打つ小さくなりし夫の背へ

最後に菜々さんにも又彼女の俳句を理解し優しく応援してくださるご主人がおられることを紹介しておきたい。最近足の弱りを理由に吟行の限界を洩らされることが多いが菜々さんにとって吟行のない俳句生活は考えられない。自分のペースを守りながらでいいので私達の良きお手本として続いて先頭を走ってほしいと願ってやまない。

句集の序を借りて随分身勝手なことを書いたことをお赦し下さい。

平成三〇年七月吉日

やまだみのる

每日句會入選句

古都四温路地へ消えたる二人連れ

寺四温めぐる筆塚茶筥塚

雲水の草鞋に今朝の霜深し

笑顔よき巫女より買はむえびす笹

父の忌に続く母の忌年の暮

年の市ト口箱は潮したたらせ

年の市とゆきかくゆき足棒に

誰にでも笑ふ赤子や日向ぼこ

ひなたぼこ特等席はいつも猫

星一つ寄せぬ孤高の冬の月

鈴の音にはづむ袂や七五三

文化の日孫に教へる箸づかひ

酢橘搾る今宵家族の揃ふ卓

家居よし木犀の香に包まれて

イエス像翳す双手に小鳥来る

売店はサイロの形牧うらら

飼葉遣る牧場乙女の笑み爽やか

霧流る摩耶の主峰を袈裟懸けに

画架たつる豆画伯らに牧は秋

喉元へまろぶ真清水涼新た

座布団に赤子すやすや夏座敷

城門に手斧の傷や身にぞ入む

秋灯下亡き母の文読みかへす

湯煙かはた夏霧か山の宿

村豊むと見たり稲穂の黄金波

一片の雲を台座に望の月

奥宮へ昼も小暗き露の磴

葉隠れに片頬染めし柘榴の実

モノレール曲りて西日避けられず

蝉しぐれ耳朶豊かなる布袋尊

大夕立町モノクロに一変す

鳩潜る度にひろがる水輪かな

太陽の塔白南風に翼ひろぐ

庭野菜満載カレ―暑に耐ふる

峰雲へコンビナートは煙上ぐ

蟻の道まさか我家の砂糖壺

青葉風おしやべり弾むカフエテラス

散る沙羅に東雲あかりさしにけり

梅雨しげし猫の居座る勝手口

噴水いま水上バスを弧の中に

万緑の山の胎内鍾乳洞

緑風に髪なびかせて騎馬乙女

下闇に片寄せられし無縁墓

謎めきし古墳を覆ふ蔦若葉

若葉してメタセコイアは森統ぶる

試歩の杖一步一步に薔薇香る

翠巒を二夕分けしたる神の滝

庭に得し一握の幸豆ごはん

校歴の百年を知る楠若葉

賑はへる日曜菜園蝶あそぶ

花の雲抽んでてをる時計台

春の雨空のどこかが明るくて

いぬふぐり休耕田に世界地図

観覧車いま天辺や花の雲

古町のうだつをかすめ燕来る

漕ぎ出せる十石舟に風光る

窯煙ひとすじ立ちて山笑ふ

泡吹いて蜷つぶやく夜の厨

遣水に撫でられ揺るる菖蒲の芽

鳥影の発止発止と梅の丘

糸ほどの蔓に芽を吹くさねかづら

末席へ吾も膝行す涅槃絵図

ハミングもとびだす風の木の芽道

中天に満ちてしろがね寒の月

神楽舞ふ湯立の巫女へ風花す

産土の軒高々と年木積む

窓の日に透きて産み立て寒卵

去年今年ほ句に癒され励まされ

古びたる七輪出番牡蠣を焼く

月冴えて一朶の雲も寄せつけず

ひざ掛けもどうぞとクリスマスチャペル

春日野へ絵巻広げにおんまつり

着膨れて愛染さんへ二人連れ

倫敦の旅を恋ひもす漱石忌

苔庭を埋め尽くして散紅葉

爽やかや宮に肅肅婚の笛

木洩れ日に水面かがよふもみぢ川

秋の蝶峡の薄日に見失ふ

落葉道踏みゆく吾も一詩人

神留守の齋庭に伏せし湯立釜

落葉巻きあげてバイクの郵便夫

まつすぐに黄落浄土けやき道

大仰な木偶の仕草に秋思憑く

紫の紋幕つらね菊花展

正門は明治の遺構菊香る

大鳥居凌ぐ老松色変へず

野紺菊神なる山の裾埋む

母在さぬ里へ夜寒の駅降りる

水神の清きせせらぎ小鳥来る

土つきの鳴門みやげの藪もらふ

紅葉溪へと迫り出せるカフエテラス

椅子の背に凭れわたしは秋の人

満天の星へ合唱庭の虫

力石三つ並んでひなたぼこ

石燈籠無月の庭に点りけり

秋草も添へて手向けし墓前かな

白寿なる師へと感謝の菊贈る

新涼や水上バスの水脈ま白

仕舞ひ湯に四肢を延ばせば虫浄土

秋茄子の雨滴はまさにアメジスト

秋暑し動く歩道にたたたら踏み

帰省の子まづ仏壇へ手をあはせ

帰省バスふるさとことば氾濫す

トンネルを抜けてふるさと星月夜

蒲の穂のてんでに揺れてぶつからず

せみしぐれ二重窓とは思はれず

雲の間に星散りばめて梅雨上がる

一カへついと消えたる夏衣

昏れてなほ空の青さよ半夏生

嫋やかに藻の花ゆらし鯉よぎる

坂がかかる芦屋の家並風薫る

梅雨最中糠床手入れ怠らず

万緑と万緑つなぐ斜張橋

初なすび洗へばきゆつと鳴きにけり

ここにある氷室の址や木下闇

風薫る標高千の吊り橋に

天つ藤万葉歌碑に屑こぼす

さざ波の消ゆれば現るるつつじ影

木洩れ日を踏みて湖畔の春惜しむ

権現の磴は胸突き花嵐

鼻めがね落つるに任せ春眠し

天帝へ玉杯翳す白木蓮

うぐひすにお隣さんの窓も開く

黒潮の海へと落つる椿かな

一幅は唐の名墨床の春

総ガラスのビル春光を弾きけり

セコイアの全容映し池うらら

ゆりかもめ春光散らす川面かな

春光を撒き散らしみる庭雀

岩垂れて鋼のごとく滝凍つる

キッチンの窓へほのぼの初明り

風花し丹塗りの宮を荘厳す

雨寒し芭蕉の墓に供花もなく

大根煮て豆煮て主婦のひと日果つ

夕しぐれ路地小走りす下駄の音

フ
レ
ー
ム
の
天
井
支
ふ
椰
子
高
し

石
落
日
和
つ
く
ば
る
は
今
バ
ー
ド
バ
ス

金
風
へ
薨
戸
上
げ
し
阿
弥
陀
堂

神泉に触れて消えたる秋の蝶

縁結び絵馬犇めける菊日和

束の間の夕日に淀の秋惜しむ

台風来任地の吾子を案じけり

一里塚ここにあるぞと残る虫

大淀の風にあそべる真葛原

母の里訪へばコスモス浄土かな

月の浜松影濃ゆく落としけり

秋澄むや堰落つ水のしろがねに

夙川の瀬に降り佇てる秋日傘

去ぬ子らの尾灯滲ませ秋時雨

滴れる山の駅舎は丸太小屋

ゆさゆさと担ぎもどりし星の竹

船端をたたきし波の音涼し

三味の音の涼しべんがら格子より

真つ白な百合に囲まれ遺影笑む

みずかげろふ飛簷に揺るる亭涼し

明易し術後の痛み遠のきて

男梅雨蓮の葉畳打ち止まらず

草矢うつ小さくなりし夫の背へ

無縁墓灼けて片寄せられにけり

花みかん空青き日はよく匂ひ

夏めくや淀滔滔と藍深め

燕の巢あまた老舗の深庇

夏来るとガラスの器磨きあげ

芽木の杜画布のなかにも芽木の杜

湯けむりの地獄をめぐる日永旅

一輛車花の籬に停車しぬ

朝靄に影絵めきたる蜺舟

一水に沿ひて御苑の春惜しむ

銀嶺の富士はるかとす花堤

胸高に袴きりりと卒業す

食ひ初めに一族郎党春の昼

ランドセル菜の花畑に見え隠れ

霾るやゴーストタウンさながらに

緋毛氈床几に払ふ春の雪

庭芝に仄と青さす春の雨

酒蔵の試飲がめあて踏青す

神の杜鳥語の洩りて春隣

朱唇いま真一文字に初弓

金の千木魁として初明り

小春日の賀茂の河原にジャズバンド

築山を統ぶひともとの冬紅葉

瀬の楽の呂律に沿ひて紅葉狩

地獄谷へと標立つ落葉道

紅葉山夕日を帯びて炎上す

路地小春稚児のお練りの笛太鼓

おしやれして小春の街へ車椅子

人
気
な
き
城
址
秋
風
吹
く
ば
か
り

十
三
仏
つ
る
べ
落
と
し
の
日
を
背
負
ふ

古
城
址
に
佇
ち
て
一
望
柿
の
里

亡き母の部屋の窓辺へ小鳥来る

露に濡れ深き祈りやマリア像

高僧の塔頭訪へば鴟高音

ピラミッド型に積まれてリング売る

夕影となりし紫苑の高さかな

東雲の空傾けて鳥渡る

蹲踞に水を満たせば小鳥来る

生身魂なに問はれても笑むばかり

争ひし日を詫び父の墓洗ふ

しなやかに額へ翳して踊の手

土用波洗濯岩を駈け上る

木立縫ひゆく名水の音涼し

宇治の瀬の樂をそびらに歌碑涼し

茶屋の灯の揺らぐ川面を鵜飼舟

月涼し庭下駄履いてポストまで

つばくらめ山紫水明袈裟懸けに

夙川のなぞへに傾ぐ松涼し

冷奴十字十字と切りにけり

梅雨最中山と積まるる願ひ石

万緑を踏んまへて立つ朱塗り門

風の蓮連鎖反応して揺るる

松籟の序破通ひくる夏座敷

橋裏が秘密基地らし夏休み

若葉風緇衣ひるがへし帰山僧

林立す帆柱の空鳥帰る

白波の一つ一つに春日燦

校庭の大楠仰ぐ卒業子

いぶし銀なる宝冠や古ひひな

池渡る風の序破急糸柳

全開す礼拝堂に芽木の風

一燭にゆらぐみほとけ堂の春

ここもまた間歩の蹟らし山眠る

下萌に傾く岨の丁目石

軒高く楯の積まるる行者宿

女正月利き酒重ね灘五郷

恙なく喜寿の一步や夫の春

冬日いま翁の塚を抱擁す

鷗尾高くヒ首の月冴えわたる

落柿舎に吾も過客や添水打つ

池の面は合はせ鏡や松手入れ

菊日和うぐるす張りの高鳴りて

石仏を撫でゐる風の秋桜

翳雲丘の上より弥撒の鐘

色変へぬ松高々と築地越し

弥陀の庭いづくに佇つも萩の風

紅白の萩に連理の句碑座る

秋めくや庭に日ぐせの通り雨

秋出水刃重ねに落合へ

蹲踞に水のあふるる星月夜

生身魂勝手つんぼと笑ひけり

蝉時雨背に降りかかる札所道

鎮魂のごと日照雨過ぐ原爆忌

紅緒蹴り出しては踊る炭坑節

でんと置く机上の薬缶築番屋

朝涼しサラダは今日も庭の幸

梅雨晴間花壇に虻の躍如たり

ここよりは一輛電車谿若葉

山椒魚岩とみまがふ面構へ

腰かけて吾も貴婦人ばらの椅子

はたたた神夫婦喧嘩を一喝す

新樹光裸婦像少し太めなる

舟人となりて難波の春惜しむ

川波の韋駄天走り春嵐

花枝垂れ水面の影と口づけす

家事雑事忘れてけふは花の人

レース編みめくセコイヤの芽吹きかな

丘おぼろ団地百棟灯点りて

野地蔵の供花は菜の花づくしかな

媪みな小袋下げて彼岸会へ

行厨は港が見ゆる梅の丘

堰落つるたびに高鳴る春の川

日野原師未来を語る建国日

起き抜けの六腑に沁みる寒の水

寒の水戸毎に引きて和紙を漉く

黒潮の風に色づくみかん山

蓋とればみどりの湯気や若菜粥

恙なき余生を謝して屠蘇祝ふ

臥す母とともに聖夜を誉め唄ふ

忘年会親し俳号呼びあひて

枯れ菊を焚く香その尉まとひつつ

障子貼る息の合ひたる老夫婦

百相の瘤もあらはや大枯木

寄せ鍋や明日は帰任の子を囲み

寒造り諸肌脱ぎし麴室

行厨は本丸の庭菊日和

虫の音が四方に輪唱ログハウス

キッチンは私のお城窓の月

月の道先行く夫へ小走りに

菊着せて命吹き込む人形師

月天心異郷の吾子の健祈る

薄雲をくぐりくぐりて今日の月

片空の雲はあかねに秋時雨

鵜飼の火果てて端山の月高し

篝火の爆ぜて鶉飼はいま佳境

灼けし石積まるる島の十字墓

お隣さん採らないのかしら枇杷たわわ

定例句会入選句

万蕾の辛夷背にたつ観世音

たくあんを家苞に買ふ彼岸寺

春時雨直と閉ざして火頭窓

うららかや試飲かさねて蔵めぐる

春の海オリーブ垣に沿ひゆけば

春館玉座の椅子を宝とす

袖垣へしだれて一枝梅つぼむ

これ何と問へば叱られ年の市

佇めば吾を虜とす群蜻蛉

ロープウエイ涼し樹海をひとまたぎ

爽籟やオリーブの葉をひるがへし

牧涼し吾を見る牛の目の澄みて

川 跨ぐホームに佇てば風涼し

せせらぎへ枝うち重ね若楓

夙川のなぞへに傾ぎ緑立つ

堰落つる水に揉まるる落花かな

梅真白石の櫃の門へかざし

草萌えに立ちし震禍のモニユメント

手づくりの命のしをり温かし

飛び翔つも阿吽の呼吸番鴨

お茶室へ水引草のつづる径

散る花に沈思黙考一詩人

しがらみのあぶくは音符水温む

海光の磴いく曲がり梅にほふ

那智黒の玉石るとしぐれけり

鈍色の空へ溶けさふ冬桜

かなかなの輪唱に覚む旅の宿

夙川堤いゆくかぎり
に蝉時雨

葦の間に鼻筋たてて
鵜現るゝ

水脈に水脈重ねて涼し
夫婦鴨

滝道に沿ひしせせらぎ呂に律に

岩襖白銀となり滝しぶく

泉石をつゞりつゞりて糸とんぼ

万緑へ蘭亭の簷いよよ反る

高欄に高鳴る瀬音夏近し

山つつじ映して山湖藍深む

若楓 さざめく影や石畳

観音へ七折れ八折れ木の芽坂

夫恋ひの歌碑誦しをれば秋の声

星霜の万葉苑に秋を聴く

しべ深く溺るる虻や薔薇香る

一杓を水子へ注ぐ老遍路

荒東風へ仁王双手の力瘤

供養待つ人形たちへ涅槃雪

蔵出しの樽高々と寒造

ハングライダー峰より放ち山笑ふ

聖壇へ彩窓洩るる春日かな

うすずみに霧立ちのぼる主峰かな

立ち並ぶ埴輪に秋思ありにけり

身に入むや慰問袋の旭日旗

千羽鶴古りて秋思や遺品展

靄脱ぎて全容現るる青嶺かな

御座船の朱を連ねゆく万緑裡

水底の影ひきつれて花筏

蔵人の膳隔てなき炉端かな

グルメなる宴が目当て納め句座

ラベンダー唄ひやまずよ風の園

秋の水天使の掲ぐ盤あふれ

ベランダは私の宇宙星月夜

草花紋青き白磁の涼しさよ

滝壺に瑠璃を散らすは糸とんぼ

ウォーキングマシンを友に梅雨籠り

豪邸の間に間に甲山笑ふ

碑に刻む千余の御霊青葉雨

群青の池へ裾引く躑躅山

梅林を巡る丹の橋見え隠れ

利き酒に頬をそめたる木の葉髪

踏み減りし葦の床板寒造

をみならに蹴飛ばされたる虚栗

食卓が主婦の書齋や獺祭忌

滝壺の禊のミスト総身に

豪邸の片蔭ひろひ吟行す

クレソンを見つけてうれし花堤

花に酔ひ人にもまれて通り抜け

しだれ梅つまみ細工のごとつぼむ

銃眼に覗きし奈落谷紅葉

遠富士の見えて海辺の夏館

あぢさみの毬に触れもす登山バス

巫女涼し藤の簪ゆらしては

花堤行くどこまでも空青し

吟行句会入選句

豊の秋扇重ねの棚田かな

白南風に吃水深く帰漁船

太閤の腰掛石に冬日燦

万緑のまつたゞ中に心字池

風薫る二条離宮の松並木

暦日の松の百態影涼し

山腹の観音様へ花の磴

春ともし趺坐大らかに金の弥陀

薄氷に脚滑らしぬ家鴨どち

鳥影の礫うちなる枯木立

石の橋木の橋渡り踏青す

身に入むや断碑を見るに拝観料

琴坂の水のしらべに秋惜しむ

船屋形もみぢ明りに金燦と

秋灯下文箱に凜と菊の紋

京なれや清水焼に氷菓盛る

一座二座三座と広げひつじ草

しがらみを越ゆる水音の涼しさよ

十重二十重みかさの山に藤懸る

澄む池に丹塗の影や浮舞台

鴟尾高き老舗料亭桐の花

秋暑し釣り上げられし鮒にほふ

ゆくりなく火伏の神へ秋時雨

鴟 高音帝御製の碑に

羨道の一步に汗の引きにけり

城址の礎石をつづる蟻の道

紅葉谿へと全開す茶屋の窓

秋灯下おもちやの木馬歩きさう

翳雲若草山を覆いけり

土間涼し二つ並びておくどさん

恋 虫 闇 深 ま れ ば 高 舞 ひ ぬ

万 緑 の 嶺 々 砦 と す ダ ム 湖 か な

老 鶯 や 局 の 墓 碑 に 額 づ け ば

落し文ひろふ帝の陵に

三門へ松亭亭として涼し

国生みの島へ八重なす波涼し

幣立てて菊炭の窯守りけり

丸窓の紅葉明りに祇王祇女

去来墓嵩の落葉に膝ついて

ゴンドラの影過り行く千草径

山上の茶房や卓に吾亦紅

秋晴れの出船入船水脈重ね

つばくらめ棚田を掠め掠めけり

迂曲る度金魚田の水にほふ

花の如琉金潜る鉢の底

路地涼し条理正しき城下町

万緑へ跳ねる鯨門櫓

せせらぎへなだれて幾重若楓

滝の道洩れ日の翳を踏めりけり

みのお道昼を灯して川床料理

花の影総身にまとひ通り抜け

花吹雪菊の御紋の門柱に

乙訓の風の序破急竹の秋

拝殿を吹き抜けて梅匂ひけり

振り上げし手に枹のなし古雛

花頭窓明るうしたるもみじ翳

錆著きインクラインに冷えつる

ごと
と
転ぶ
残念
石の
秋日
影

水分
の宮
は常
濡れ
杉落
葉

夏木
立女
人高
野の
礎こ
ごし

夕映えて線刻涼し磨崖仏

岩走る丹生の玉水みどりさす

杉箸の香る吉野の夏料理

翠嵐に現れて白妙神の滝

暮れかぬる空へ雪白山法師

旅の膳鯉の洗ひを花と盛る

須磨涼し鏡びかりに青畝句碑

あたたかや一つ祠に神ほとけ

春寒し墓域を外れてクルス墓

梅ひらくみむね豊かに観世音

昨夜の雪観音像を莊嚴す

木の葉雨笠を目深に親鸞像

筆先に似たる蕾や彼岸花

村人のすぐそこ遠し彼岸花

枝分れの気配を早やも袋角

野遊びの園児ら声を撒き散らす

夏めくやはるか比叡は藍色に

太鼓橋松の緑を両袖に

秋思われ腰痛封じの石に座し

パステル画さながら沼の紅葉翳

高欄へ日の斑を散らす若楓

ふる里はあの山向かふ鳥雲に

冬うらら湯煙に立つ道祖神

露の歌碑犬養節の聞こへさふ

あとがき

この度、みのるさんの骨折りで思いがけなく句集を編むことができませんでした。永年の夢が叶い、入門以来の句を読み返しながらしみじみと越し方を想い出しております。

早いもので『ゴスペル俳句会』とのご縁をいただいてから十数年が経ちました。どなたとも和やかに旧知のごとくお付き合いできるこの会の雰囲気は私にはとても居心地よく大好きです。京阪神の各地、それに明日香、吉野、能勢での一泊旅吟等々ほんとうによく出かけました。この句集を練りますとその時々的情景が絵を見るようによみがえります。

夢中で過ごしてきた俳句ライフですが最近では加齢のせいかわと立ち止まることもありました。ちょうどそんな折に句集のお話をいただきもう少し頑張らねばと思いなおしました。

句集名「星月夜」は、みのるさんから頂きました。夜更けの庭で一人星空を見上げるのが大好きで、離れ住む我が子等に思いを馳せ、嬉しくもあり切なくもあるひとときです。

最後になりましたが、いつもご一緒に励まして下さった句友のはく子さん、満天さんに感謝します。お二人のお蔭でここまで続けて来れました。また身に余る序文を賜り、句集について何かと助言いただきましたやまだみのるさん、印刷、製本のご労をいただいた有松せいじさんにも心より厚くお礼申し上げます。

平成三〇年七月吉日

白井 菜々

『星月夜』 白井菜々句集

平成三〇年七月三〇日 印刷

平成三〇年七月三〇日 発行